

東京バッハ合唱団 月報

[第 584 号] 2011 年 2 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 郵便振替：00190-3-47604
Tel：03-3290-5731 Fax 専用：03-3290-5732
mail: bachchortokyo@aol.com http://www2.tky.3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.584

February 2011

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

第 105 回定期演奏会、アンコールは 400 人の大合唱

2011 年 1 月 9 日、石橋メモリアルホール

第 105 回定期演奏会は、昨年 6 月にひきつづき、新装成った上野学園石橋メモリアルホールでの 2 度目の公演となりました。

年明け早々の本番は、ご来場の方々には、年末の慌しさから開放されて、ほどよい時期だったようです。演奏する側にとっては、暮れも正月も返上しての、ちょっとした冒険でしたが。

当日は好天にもめぐまれて、多くのお客様をお迎えすることができ、以下にご紹介するアンケートへのご回答では、大いにご満足いただいた様子が伝わってきます。寒い中のご来場、まことにありがとうございました。

モテット終結の「アレルヤ」をアンコールした後で、指揮者が客席にむかって「カンタータ 147 番、第 10 曲のコラールを、みなさんご一緒にお歌いください」と提案したのは、われわれの定期演奏会としては初めての出来事だったかも知れません。

客席とステージを合わせ、ほぼ 400 人の大合唱は圧巻でした。コラール イェス わが心の愉しみ（流布している訳では「主よ、人の望みの喜びよ」）の人気の高さを改めて感じさせられるとともに、日本語で歌えばこそその共感、とも思われました。ここに、バッハ時代の民衆と「コラール」の在り様が垣間見えたような気がします。

アンケートより

演奏全般について：

- ・演奏者のバランスと会場の音響が一致していて、非常によかった。
- ・合唱、高齢の方もいらっしゃるようだが、声が若々しい。ソリストも、オルガンも、オーケストラも一体になって、美しい響きを聴かせていただいた。147 番、トランペットとオーボエの調和が美しい！
- ・至福の時でした。皆様の日ごろの努力と、宗教曲を歌う姿勢の素晴らしさを感じました。とても暖かい演奏でした。
- ・小さい方から年配の方まで、幅広い年代の方で形成さ



コンサートの締めくくりは、観客もいっしょにコラールの合唱：第 105 回定期演奏会、BWV111, BWV68, BWV147, BWV230。（2011 年 1 月 9 日、石橋メモリアルホール。写真：鈴木 真氏）

れている合唱団は貴重な存在だと思います。

- ・ホール、音響効果との調和がよく、素晴らしかった。
- ・カンタータ 147 番が良かった。最後に客席と合唱団がいっしょに歌ったコラールが良かった。
- ・合唱の演奏会には、はじめて足を運びました。迫力があり、とても心地よかったです。音楽も非常にまとまっていた、うまかったです。
- ・とても美しい声で感動しました。一生懸命に歌っている姿を見るのはいいなあと思いました。年少の方のうまさにもビックリしました。素晴らしい音楽をありがとうございました。
- ・荘厳で、素晴らしかった。
- ・主を讃美する気持ちが伝わってきます。程よい大きさのホールで演奏が身近に感じられ、暖かい気持ちになりました。一緒に歌えてよかったです!!! です。
- ・心にゆとりができました。
- ・ソロのみなさんすばらしい。合唱もすばらしいハーモニーで、ひきつけられました。

とくに日本語演奏について：

- ・このような活動を 50 年続けておられることに感動を覚えました。

< 4 頁につづく >

カンタータ第 190 番

(主にむかいて歌え 新たなる歌を)

喜びには歌がある。それは、クリスマスのメッセージでもある。ルカによる福音書には、主イエスの降誕をめぐって、4つの讃歌(*)が記されている。なかでも馴染み深いものといえば、「マリアの讃歌(マニフィカート)」(1: 47-55)ではないだろうか。

2011年が幕を明けた。私が大学生だった頃、すでに日本経済は失速し、失われた10年に突入していた。山一証券が破綻し、泣き崩れる代表者の記者会見は時代を象徴していた。あれから約15年。リーマンショックが追い討ちをかけ、失われた20年のうちに、私たちは新年を迎えた。歌どころではない、というのが正直な心境かもしれない。

しかし、バッハは歌った。悲しみの日に、苦しみの日に、ライブツィヒの市参事会とぶつかってもなお、カンタータの筆を止めることはなかった。まことの喜びとは、うかれて泡のように消えていくようなものではあるまい。限りあるいのちを生きるわたしたちが、無限の真理と呼べる何かを見据えて生きるとき、「にもかかわらず」喜ぶことができ、それが歌となるのではないか。

バッハは、1724年の新年に初演されたこのカンタータ190番の冒頭の合唱(**)で、すべての始まりを告げるような、華やかで祝祭的なトランペットの序奏につづけて、神への感謝を4声のユニゾンで歌わせ、第2曲レチタティーヴォでは、わざわざやまいいくさの現実からどうか守ってほしい、という祈りをこめる。

最後のコラルでは、ヨハネス・ヘルマンの詩が用いられている。ヘルマンは、「シュレジアのヨブ」(『コラルの故郷をたずねて』小栗献著)と呼ばれるほど、不幸の連続を生きた牧師であり詩人であった。愛妻との死別、ペストの流行、激痛の闘病。私なら耐え切れないかもしれない。その彼が「にもかかわらず」この詩において神を讃え、平和を願っている。バッハはどのような思いで、彼の詩を新年のカンタータに採用したのだろう。

不安と争いの絶えない、歌どころではない2011年の皮切りに、「にもかかわらず」このカンタータに聞き入ってみてはいかがだろうか。聞き続けるところに、また歌い続けるところに、まことの喜びの意味を探り当てることが出来るかもしれない。

(日本キリスト教団 番山町教会伝道師)

*)他に「ザカリアの預言」1: 68-79、「天使の讃歌(グローリア)」2: 14、「シメオンの讃歌」2: 29-32。

**) 日本語歌詞 <http://www.ab.auone-net.jp/~bach/>。当カンタータの歌詞をご希望の方には、事務局より郵送いたします(無料)。

CDバッハ・カンタータ50曲選[第19巻]に収録。A佐々木まり子、T平良栄一、B渡邊明、大村恵美子指揮・東京バッハ合唱団/東京カンタータ室内管弦楽団。1997年録音(第96回定期演奏会、石橋メモリアルホール)

[第19巻]在庫あり・特価:送料込み500円

バッハを通しての対話

柳元宏史『全部おすすめ 50 曲選!! [上]』を読んで

松本 敏之

柳元さんお元気ですか。

柳元さんが月報に連載されている「全部おすすめ 50 曲選!!」の前半 25 回分がまとめられた冊子を興味深く読ませていただきました。

柳元さんの文章には、信仰者ならではの視点があり、いい意味で説教のような味わいがあります。柳元さんは、バッハの音楽を味わいながら、それにとどまらず、その奥にあるもの、音楽に込められた使信(福音)を聴こうとしておられる。バッハの音楽を通して、その向こうにいるルターやパウロと対話し、イエス・キリストと向き合っておられる。そこに根ざして生きておられることが伝わってきます。

日本では、なかなかそういう文章を書ける人はいまいないので、その意味でも貴重です。もちろんそうした「対話」が成り立つ前提として、バッハが日本語で歌われているということをお忘れてはならないでしょう。

バッハが聖書と対話し、大村恵美子さんがその対話に加わり、東京バッハ合唱団が加わり、柳元さんが加わるという、重層的なコラボレーションの世界がここにあると思いました。

連載時にその都度読ませていただいていたのですが、こうしてまとめられると、このCDを味わうための何よりの手引きとなっています。同時に、柳元さん自身の魂の歩みの貴重な記録となっていると思いました。

読みながら、柳元さんが2006年4月から経堂緑岡教会において、神学生として過ごされた3年間をなつかしく思い起こし、また岡山での日々を想像しました。

4月より新しい任地へ赴かれると聞きましたが、聖書の使信とバッハの音楽に励まされて、進み行きください。主が共におられます。この連載も、ぜひ50回まで続けてください。

(団友、日本キリスト教団 経堂緑岡教会牧師)

冊子『全部おすすめ 50 曲選!! [上]』

柳元宏史さんの連載は、全50回を予定しており、ご寄稿のつど、随時、掲載させていただいています。

昨夏、ちょうど中間となる第25回の掲載を機に、第1回からのものをまとめて冊子とし、同夏の合唱団創立記念祝会の折に出席者の皆様に、お土産として差し上げました。

後半の再開にあたり、この冊子を多少増刷しました。ご希望の方には実費でお分けします(B5判/16頁、手づくり製本、送料込み500円)。お申し出ください。

なお、「CDバッハ・カンタータ50曲選」は、再編集に向け、以下が品切れです。[第1巻][第2巻][第5巻][第7巻][第8巻][第13巻][第15巻][第17巻]。収録内容、在庫状況などは、事務局までお問い合わせください。

バッハ合唱団をとりまく人々

[第 1 回]

大村 恵美子

創立 50 周年 (2012 年) が近づいてきて、あれこれと合唱団の発足時のことにも思いを馳せるこのごろです。ひとが辿ってきた人生をかえりみて、交誼を交わして今日にいたった人々のことを、ゆっくりと振りかえってみたいと願うのは、自然な心情でしょう。

数年前、創立記念日のお祝い会の引き出物として、私は、夏目漱石書簡集から対象者をしばって寄せ集めた小さな冊子を、皆様にお持ちかえりいただいたことがあります。当時の人間はよく手紙をとり交わし、とりわけ漱石のような文豪ともなると、相手もていねいに手紙を保存していて、後世にそのやりとりの詳細が克明に伝わることになりました。

当合唱団でも、毎月発行される月報、数年ごとに改められる住所録等々で、団関係者のおびたしい情報が残されましたが、それらを網羅して一望のもとに見渡せるものを、というのはまず不可能です。そこで、私が思いついたのは、かつて 30 周年の折にまとめた『東京バッハ合唱団 三十年の歴史』に登場する名前をリストアップし (計 171 名) その方々の消息を、現在わかる範囲でたずねてみようということでした。

戦後しばらく、どこでも「たずねびと」の運動がさかんでした。私も、新聞のそのひとこまから、とだえていた満州・新京時代の数年がよみがえって、将来にもつながったことは、上掲『三十年の歴史』で紹介したとおりです (同書 p. 205 以下。朝日新聞 1980 年 1 月 21 日「たずねびと」欄の記事から、40 年前の満州時代の小学校教師や旧友との交際が復活した。その中には、シェイクスピア学者、小学 1 年の小田島雄志少年もいて、やがて 1988 年東大教養学部の特演演奏会場で、団員とも交歓)。

半世紀を生きてきた合唱団が、その間の人物交流を、生き生きと甦らせることができるのであれば、それはすばらしく楽しい企画となるのではないのでしょうか。この試みは、今年いっぱい続けて、来たる 2012 年に発行したいと願っている記念誌に、何らかの形で寄与したいと考えています。

じっさい始めてみると、とくに団友や後援会員の方々の、最終的な肩書きやご存命の如何など、慎重を期さねばならず、なかなか手ごわい感触ですが、地道に問い合わせなどの努力をつづけようと思っています。団員については、お偉い方々もおおぜいいらっしゃいますが、公

『東京バッハ合唱団 三十年の歴史』(国際文化出版社、1992 年、B5 判・350 頁、定価 3000 円) は、合唱団事務局に残部があります。ご希望の方はお申し出ください。送料込み 3000 円でお届けします。

平に“団員”とだけ公表させていただきます。

上記の 171 名のリストは、創立後 30 年間の出会いにかぎられますが、現在につながる人脈をすくい上げることに眼目を置いて、この“バッハ合唱団をとりまく人々”を、少しずつ、当「月報」紙上で紹介してゆくことにします (敬称略・ゴチック表記)。

手始めに、最近会食して、その折の写真が残っている 4 人 (筆者をふくむ) を、第 1 回にとり上げました。



森井 眞 (団友、明治学院大学元学長) [写真 中央右]

創立から現在にいたるまで、一貫して団の精神的バックボーンを成してくださっています。世田谷の桜上水のご自宅は、その一郭を (後には 2 階を増築して) 団の練習場にご提供くださった、活動開始の当時から変わらず、91 歳の現在でもなお、お元気で第一線のご活躍です。

月報 580 号 (2010 年 10 月) 掲載の「DVD『森井眞 自由と尊厳を語り続ける歴史学者』(記・加藤剛男) をご参照ください。

白木博也 (後援会員、洋画家) [写真 手前右]

後援会の立ち上げ以来のご熱心な会員 (86 歳)。定期演奏会は、ほぼすべてをご来聴。団のそのほかの催しにもお顔をお出しくださいます。

“教駒 (現在の“つくこま”、かつての教育大学付属駒場高校) のシロキ” といえば、綺羅星のごとき卒業生たちのなかで知らぬ人はいない、という名物美術教師だったとか。今日も勤勉に制作活動をお続けで、隔年に銀座等で個展をお開きになります。

森井 (フルート)、白木 (リコーダー)、筆者 (ピアノ) のトリオで、往年の「ばっはめいと」の常連。森井氏の学長引退後も、最近まで我が家でのアンサンブルをお続けになりました。

大村健二 (団員) [写真 手前左]

明治学院大学在学中から合唱団事務局を担当、1948 年生れの全共闘世代。当「月報」の編集も。[冷や汗 ☹️]

筆者：おおむら・えみこ (主宰者) [写真 中央左]

大村恵美子先生の「傘寿」を祝って 葉山散策、ご一緒にどうぞ

加藤 剛男（団員：バス）

大村恵美子先生は、今年3月9日で80歳を迎えられます。自然のお好きな先生と一緒に、葉山散策でお祝いしようと、下記のような1泊遠足を計画いたしました。奮ってご参加いただきたくご案内いたします。

3年前の喜寿のお祝いには、後援会員の方々数人を交えて箱根に繰り出しましたが、このたびは、逗子葉山をめぐる近代文学散歩という趣きです。大杉栄・神近市子・伊藤野枝の、例の(?)事件の「日影茶屋」で食事。国木田独歩・徳富蘆花ゆかりの「柳屋」に1泊ですが、途中での合流も可能です(印)。また、おすすめのスポットがあれば、お教えてください。

お申し込みは、東京バッハ合唱団員・加藤剛男(TEL 080-3175-6057) または合唱団事務局まで。

[日時] 2011年3月6日(日)、7日(月)

[場所] 神奈川県葉山周辺

[費用] 30,000円以内(1泊宿泊・朝食代、3回の会食代、交通費、博物館・記念館入館料等ふくむ)

[申し込み締め切り] 2月11日

[日程]

3月6日(日)

- 10:00 集合(最初からの方)「経堂駅」改札口
- 10:03 小田急線「経堂駅」発(急行)
- 11:15 江ノ電「藤沢駅」発
- 11:55 JR「鎌倉駅」発
- 12:20 京急バス「逗子駅」発
- 12:55 葉山「鐙摺(あぶずり)」着
- 13:00 「日影茶屋」にて会食
- 14:30 京急バスで海岸散策、しおさい公園、博物館、山口蓬春記念館など
- 17:00 「葉山マリーナ」のフランス料理「恩波亭」にて会食、解散(初日のみの方)
- 20:00 宿泊「柳屋旅館」
(逗子市桜山9-4-16、電話番号046-871-2130、バス停「切り通し下」下車)

3月7日(月)

午前中、柳屋旅館でくつろぎ、逗子駅付近朝市、湘南国際村等見学

- 12:00 葉山「マレ・ド・チャヤ」でランチ会食
付近散策
- 15:00 京急バス「諸橋」発
- 16:00 JR湘南新宿ライン「逗子駅」発
- 17:00 「新宿駅」または「池袋駅」着
(解散、元気な方は通常の練習へ)
- 18:30 練習(目白聖公会)

第105回定演アンケートより

<1頁からつづく>

・理解するのが難しいバッハの曲を、わかりやすく聴かせていただきました。

・今回はじめてだったが、祈りに似て、バッハが自分の心のなかにはいつてくるような感じだった。

・コーラスの方々の日本語がやや聞き取りづらかったように思います。楽譜を見ながらの演奏がやや残念に思いました。

・カンタータを日本語で聞けるということは、ありがたいことです。男声陣のがんばりを感じました。

・句読点、音が複数にわたるため、聴きとりにくかった。訳詞の句割りに一考あり。モテットはよかった。

・とてもわかりやすいです。プログラムを見ながら聞くと、よりいっそう理解でき、曲の構成もチェックできて、心に深く入れることができました。

・福音は、その国のことばで初めて伝わる。翻訳のご苦労に感謝。

・ルターは母国語を用いて、万人が無理なく御言葉を深く理解し、親しみをもつことを願いました。バッハはルター訳聖書を用い、ルターを尊敬していました。もし2人が現在にいたら、母国語演奏は必至だと思います。合唱は聞きとりづらいものの、ソロの時、特に意義深く思いました。

・透明感のある声に、日本語のかもしだす深さ、重厚感をとても感じました。4人のソリストの方々の素晴らしさ、感動しました。最後のコーラル、涙が出そうでした。

本日の運営全般、会場について等：

・プログラムの歌詞が見たくなるので、もう少し照明が明るくなればよい。全員での合唱とは好企画と思ったが、この時も照明が暗かった。

・会場ホールが新しくなり、音響効果のすばらしさに感銘を受けました。今後の演奏会に、大いに期待します。

・長い年月くり返されてきた活動、大切に、今後も演奏をつづけていってください。応援しています。

・すべて良し、感謝。命の洗濯出来ました。

・CDのBWV147再販を早くしてほしい。

・プログラム冊子がしっかりできていて、良い。

・前回も要望したが、会場の出入り口がわかりづらい。

BACH-CHOR
TOKYO
50
1962-2012

東京バッハ合唱団
2012年7月
創立50周年

東京バッハ合唱団<創立50周年記念ファンド>

- ・目的：団運営の安定を図り、記念事業を助成する
- ・基金の目標額：500万円
- ・募金単位：1口1万円 × 500口
- ・募金期間：2011年1月から2014年12月

<創立50周年記念ファンド>報告 (2011年1月20日現在)

募金達成額：350,000円(応募人数：20人)

受付開始の元旦を待たずに、早々にご送金が始まりました。日本全国からのご支援、感謝の一語です。